『少年日本』掲載の
山本伸一郎「ペスタロッチ」について（２）

伊　藤　貴　雄

はじめに
1　少年雑誌に執筆した経緯
（1）『少年日本』について
（2）著者の回想から
2　若き池田のなかのペスタロッチ
（1）探究の鍵としての「読書ノート」
（2）『シュタンツ便り』という著作
（3）注入教育批判
（4）人間教育
（5）『隠者の夕暮』という著作
（6）人類の悲願としての教育
3　山本伸一郎「大教育家　ペスタロッチ」を読む（以下本号）
（1）平和＝非戦
（2）母の感化
（3）人間教育
（4）人類の進歩のために
むすびに

3　山本伸一郎「大教育家　ペスタロッチ」を読む

これまでのところ本稿は、雑誌『少年日本』1949（昭和24）年10月号に掲載された山本伸一郎（これは同誌の編集長を務めていた池田大作のペンネームである。それゆえ、本稿では基本的に「池田」と略記する）のエッセー「大教育家　ペスタロッチ」に照準を定め、そこに込められたメッセージを精確に読解すべく、“準備作業”を進めてきた[1]。これからいよいよ“本作業”に

[1] 拙稿「『少年日本』掲載の山本伸一郎「ペスタロッチ」について（1）」『創価教育研究』第４号、2005年、31－62ページを参照のこと。なお、本稿においても、引用文中では漢字・かなを現代表記に改めた。下線はすべて本稿筆者による。また［　］内は本稿筆者の挿入である。

Takao Ito（創価教育研究所講師）

入ることになるが、それをスムーズに遂行するためにも、いったんここで、今までの論述で明らかになったことを整理しておきたい。

第１に、エッセー執筆までの経緯について。

このエッセーは、もともと別の作家が執筆する予定だった。池田宣政（以下、本稿主題の池田と区別するため、フルネームで記す）という大衆作家で、２年前の1947（昭和22）年に『孤児の父　ペスタロッチ』という評伝を上梓していた。ところが校了間際になって彼の原稿が得られず、急遽、編集長池田みずから、原稿を書くことになったのである（このとき山本伸一郎というペンネームが使用された）。池田はすでに1947（昭和22）年ころ（＝19歳）、長田新訳『隠者の夕暮・シュタンツだより』を読んでおり、当時の「読書ノート」にはそこから５つの文章が抜き書きされている。エッセー執筆の際にはこのノートも活用された。

第２に、若き日のペスタロッチ体験について。

池田が19歳のときにどのようにペスタロッチを読んでいたかを、「読書ノート」をもとに再構成すると、３つのキーワードが浮かび上がってくる。すなわち、《直観教授》と《人間教育》、そして《人類の浄福》である。直観教授とは、「子供を取り巻く自然や、子供の日常の要求や、いつも活発な子供の活動そのもの」を陶冶の手段とする教育である。また、人間教育とは、“子どもたちの幸福が教師の幸福であり、子どもたちの喜びが教師の喜びである”ような家庭的環境で、子どもたちの知性や価値観の基礎をはぐくむことである。こうした“自然な”方法によって、すべての人間が幸福になる力を手にすることが、教育の目的であるとペスタロッチは述べている。軍国主義の暴威に苦しめられた池田にとって、こうした民主的な教育思想は、新生日本の未来について思索するうえで大きな手がかりとなったはずである。

――以上が本稿前回分の要約である。

これでようやく、21歳の池田のエッセー「大教育家　ペスタロッチ」を読むための準備作業が整ったことになる。19歳の池田の脳裏にあったペスタロッチ像をほぼ明らかにできたので、本稿としては、その像を念頭に置きつつ、同エッセーを読解すればよいのである。ペスタロッチに関する池田の《原印象》というレンズを通して、同エッセーを読んだときに、いかなるメッセージが浮かび上がってくるだろうか。あわせて、当時書店に出ていた代表的なペスタロッチ伝と比較対照することで、池田の描くペスタロッチ像の特徴を把握してみたい。この作業を通して、池田教育思想の《原型》をつかむとともに、若き池田のペスタロッチ体験が教える“読書の意義”ないし“教養の役割”に傾聴しようというのが、本稿の企図である。

（１）平和＝非戦

それでは、さっそく、本文の読解に取りかかろう。

エッセーの内容は、「一、尊い塑像」「二、見込みない少年」「三、失敗また失敗」「四、ここに天職あり」「五、五十三歳で認められる」の５つの部分から成っている。これらの小見出しからも分かるように、池田は、限りある紙幅のなかでペスタロッチの生涯全体をスケッチしている。本稿第１節で述べたように、『少年日本』10月号の前号にあたる『冒険少年』８月号には、次号予告

として「大教育家　ペスタロッチの少年時代　池田宣政先生」とあるから、もしも当初の予定通りに池田宣政が執筆していたならば、もっと少年時代に限定した内容になっていたかもしれない。いや、そればかりか、話の力点の置き方からしてずいぶんと異なっていたにちがいない。２年まえに発刊された池田宣政の『孤児の父　ペスタロッチ』(1947［昭和22］年、世界社）をひもとくにつけ、そう推測せざるをえない。だが、このことについてはのちほど詳述しよう。

以下、山本伸一郎（＝池田大作）著「大教育家　ペスタロッチ」の中身を、小見出しごとに順に見ていきたい。まず本文を掲げ、そのあと本稿筆者なりの注釈を加えさせていただく。

「一、尊い塑像

平和な国スイス。スイスという名前を聞いただけでも私達の心は、あの雄壮なアルプスの山々につつまれた、絵のように静かな国を思い出さずにはいられません。／今から約百五十年前、このスイスがあの有名な大教育家ペスタロッチを生んだのであります。今日もスイスのイーフェルドンには、ペスタロッチを記念した一つの塑像が建てられて居ります。そして、その台石には次の様な文字が書かれてあります。『ニューホーフに於ては貧者の恩人、スタンツに於ては孤児の父、ブルグドルフに於ては国立学校の創立者、イーフェルドンに於ては人民の師……人の為には万事を尽し、己れの為には何ものをも止めず』と、それは実にペスタロッチの一生を物語って居るものであります。ああなんと尊く偉大な大教育者の姿でありましょう」(2)

冒頭に、「平和な国スイス」とある。何気ない一言のように思えるかもしれないが、一個の思想家としての池田大作を研究しようとするとき、この短いフレーズもじつに象徴的な意味を帯びて響いてくる。何度もいうようにこのエッセーは、池田が社会に向けて発信した初めての文章なのであり、その冒頭が「平和」の二字で開始されているという事実を、軽々に見過ごしてはならないと思うのである。しかもこの二字は、ペスタロッチという人物の形象を介して、「教育」の二字とセットで用いられている。後年池田が創価大学の創立にあたり、基本理念の１つに「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」というモットーを掲げた（1969［昭和44］年５月）ことを想起したい(3)。なにも本稿筆者は、この理念と上記引用文とを短兵急に結びつけたいわけではないが、しかし、両者をまったく無関係のものと見なすこともできない。そのことは、いまから述べる事実によって理解されるであろう（ちなみに池田は、さきのモットーとあわせて、「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」という２つの基本理念を掲げている。これらとペスタロッチとの関連性も、いずれ本稿の展開とともに浮かび上がってくるであろう）。

＊

まず注目したい点は、上記引用文（下線部）において、池田が「平和」という言葉を、「非戦」ないし「非暴力」の意味で用いているという事実である。一見当然のことのように思えるこの事

(2)『少年日本』1949（昭和24）年10月号、85ページ。

(3)『創立者の語らい』創価大学学生自治会編、1995年、31ページ。

実も、時代の文脈を考慮するとじつは大きな意味を持っている。本稿筆者もかつて牧口常三郎の戦時下抵抗を扱った論考において報告したことがあるが[4]、日中戦争開始から太平洋戦争終結に至るまでの８年間（1937－1945年）に日本人が用いた《平和》という言葉は、今日多くの人がイメージするような“反戦”の意味を持っていなかった。そのかわり、《平和のための戦争》という言葉が政府やマス・メディアによって日々連呼され、悲しいかな、平和の二字は“聖戦のスローガン”と化していたのである。もちろん、戦争の大義名分として平和を掲げる傾向はそれ以前にもないわけではなかったが、この傾向を決定づけたのは、本稿筆者の見るところ、日中戦争開始２ヵ月後の1937（昭和12）年９月に昭和天皇が発した「支那事変に関する勅語」である。戦争の目的を「中華民国ノ反省ヲ促シ、速ニ東亜ノ平和ヲ確立セム」[5]ことにあるとしたこの勅語を受けて、翌年９月には警保局が「新聞指導要領」を発表し、この目的を遂行するための言論活動をメディア界に命令する[6]。これ以降、戦争協力者（たとえば武者小路実篤）の文章には《平和》の語が頻出するのに対し、反戦家・厭戦家（たとえば北御門二郎）の文章にはこの語が見られなくなる、という逆転現象が起きることになった（武者小路と北御門がともにトルストイを師に仰いでいたことを考えると、これはまことに興味深い現象といえよう）。いうまでもなく、『創価教育学体系』の著者・牧口常三郎は、後者のグループに属していた。

このような歴史をふまえたうえで、もう一度、「大教育家　ペスタロッチ」の冒頭部を読んでみよう。「平和」という言葉は、「スイス」という国名と結びつけられ、「絵のように静かな」という形容詞句とセットで用いられている。ここでいわれているのは、もう上述のような、戦争の大義名分としての虚偽の《平和》ではない。スイスは、第二次世界大戦中もヒトラーの暴虐に屈しなかった永世中立国である。1947（昭和22）年には、ダグラス・マッカーサーが社会党書記長の片山哲に語った「日本よ、東洋のスイスたれ」という言葉が流行している（マッカーサーと片山の会談は５月24日）。また、これに先駆けて日本人の目をスイスに向けさせたのは、スイス在住の作家ヘルマン・ヘッセのノーベル文学賞受賞であった。ヘッセは、二度の世界大戦を通じ一貫してドイツの軍国主義に抗しぬいた数少ない知識人の一人である[7]。中村真一郎は『1946・文学的

---

(4) 拙稿「牧口常三郎は国家政策の何に抵抗したか」『創価教育研究』第３号、2004年、115－136ページを参照のこと。

(5) 友田宜剛『詔勅の謹解と日本精神』、国民教育普及社、1941年、379ページ。本書は、明治・大正・昭和天皇の勅語を集めて解説をほどこした、国民教化用書籍の１つである。

(6) その一文には、「支那ノ抗日容共勢力ヲ一掃シ、親日政権ヲ育成発展セシメ之ト帝国ガテヲ握リ東洋永遠ノ平和ヲ確立スルコトハ今次聖戦ノ大目的ナリ。コノ大目的ヲ阻碍スル言説行動ニ対シテハ断乎之ヲ排撃シ一路所期ノ目的達成ニ邁進スルノ実力ト信念ヲ有スルコトヲ明ニスルコト」とある。内川芳美編集解説『現代史資料41――マス・メディア統制２』みすず書房、1775年、165ページ。

(7) 日本でヘッセというと、甘美な青春小説がイメージされやすいけれども、その典型的作品とされる『車輪の下』がじつは軍国主義批判の書であることは、ほとんど知られていない。同書でヘッセは、詰めこみ教育や受験制度の背後にある《国家の暴力》を鋭く看破している。つまり、国家も、国家に雇われている教師も、しょせんは《国家に役立つ人間》を作ろうとしているにすぎず、子どもたち一人ひとりの幸せを考えて教育しているのではない――そうヘッセは告発するのである。主人公ハンス・ギーベンラート少年がその下で呻吟する「車輪」とは、帝国主義の別名にほかならない。拙稿「『車輪の下』訳者解説」

考察』の最終章で、「精神の自由を政治の暴力から救うために、孤独を選んでスイスに亡命し続けている」ヘッセを讃えて、「ノーベル賞は公平に与えられる。平和と人道と美とのために書いた精神の上に」と書いた（1946年11月）[8]。政治的暴力の対義語として「平和」の語が使われていることに注意したい。だが、なんといっても、一般国民が平和の語を「非戦」と同義のものとして使うようになった最大のきっかけは、新憲法の成立であったと見てよい。「正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」――この戦争放棄条項を含め、日本国憲法は1946（昭和21）年８月に衆議院を通過、10月に貴族院で可決され、1947（昭和22）年５月３日に施行された[9]

（『ヘルマン・ヘッセ全集４』臨川書店、2005年、367－370ページ）、および同「ヘッセ平和思想の源流を訪ねて――『車輪の下』への教育文化史的注解」（『逃避／対峙／超克　ヘルマン・ヘッセにおける＜内面への道＞の諸相』日本独文学会、2005年、３－23ページ）を参照のこと。

ついでに付記しておきたいことがある。『車輪の下』が書かれたのは1903年９月から12月にかけてであるが、同時期に日本では牧口常三郎の『人生地理学』が出版されている（1903年10月15日）。『人生地理学』もまた、詰めこみ教育の病根である国家主義を批判した本である。時を同じくしてドイツではヘルマン・ヘッセが、日本では牧口常三郎が、帝国主義政策の手段と化した教育を弾劾していたのである。二人とも30歳前後の青年だった。当時『車輪の下』は“受験小説”として、『人生地理学』は“受験参考書”としてそれなりに評判を呼んだけれども、そういう表層的な読み方は今日ではもはや通用しえない。現代の世相を見るにつけ、この二著で展開されている《教育批判》《文明批判》がいささかも古びていないとの感を深くする。人類平和を志向した一流の思想書としてこれらを読むべきときが、いま来ているように思う。

(8) 加藤周一・中村真一郎・福永武彦『1946・文学的考察』冨山房百科文庫、1977年、235ページ。

(9) 池田も、のちに小説『人間革命』第２巻（初版1966年）のなかで、新憲法の制定過程について多くの紙数を割いて論じている。「幣原内閣は、新憲法草案を、置き土産として退陣し、外相の吉田茂が、新内閣を組織した。そして、議会の審議に臨んだが、繰り返される質問の中で、吉田は本音を吐いた。／『新憲法が出来たが故に、日本国民の政治的性格が変更するとは考えていません』／実に、驚いた発言である。新憲法をただ平和の理想として祭り上げ、現実はいささかの変更もないと、旧憲法の感覚で答えているのである。／結局、時の政府は、嶮しい国際情勢の谷間を通り抜ける旗幟として、第九条を掲げたといった方が、適切のようである。／ある時、衆議院で、共産党の野坂が、自衛戦争まで放棄するのは行き過ぎであると迫り、戦争の放棄を論難した。その時、吉田はこれに反駁していわく、／『国家の正当防衛による戦争は、正当だとされているようだが、私はかくのごときことを認めることは有害であると思う』／後に、この二人は主張をまったく取り替えて論争を繰り返すことになる。今日、これらの議事録を読む時、馬鹿馬鹿しいほどの矛盾が、数多く散見される。／共に、凡夫である。利口そうに見えて、皆、愚かな人間なのだ。もっと広々と、大聖人の言に、謙虚に耳を傾けねばならないと思う。／結局、質疑応答の両方とも、第九条を、おもちゃの如く、弄んでいたに過ぎない。真の理解から発した論議ではなかったわけである」（池田大作『人間革命』第２巻、聖教新聞社、1966年、64－65ページ）。――ここに叙述されているように、1946（昭和21）年の国会で、総理大臣自らが「正当防衛による戦争」という発想を有害であると明言した。これは、「平和」の二字をもはや戦争の大義名分としては用いない、という宣言のはずであった。ところが、のちにこの宣言を最初に破棄しようとしたのも同じ総理大臣であった。つまるところ、池田が慨嘆するように、「真の理解から発した論議ではなかった」のである。

ちなみに、上の文章を記したとき、池田は創価学園（東京・小平市）の設立に向けて心血を注いでいた（1965［昭和40］年７月に設立構想を発表、翌年４月に建設委員会が発足している）。1968（昭和43）年４月の開校時にはこう語っている。「今日では、教育の重要性は、もはや国家だけの問題ではない。世

ともあれ本稿が強調したいのは、「大教育家　ペスタロッチ」の冒頭部にも、こうした終戦後の時代相が刻印されているという一事である。池田が『若き日の読書』でつづっている「ペスタロッチの『隠者の夕暮・シュタンツだより』を最初に岩波文庫で読んだのは、たしか自宅近くの読書サークルに参加していたときのことである。新生日本の民主教育のあり方について、友人と夜を徹して議論した記憶もある」(10) という回想は、このことをよく裏づけている。『私の履歴書』によれば、このペスタロッチ体験は1947（昭和22）年のことという (11)。その時期に「新生日本の民主教育のあり方」を模索してペスタロッチを学んでいたからこそ、池田は「大教育家　ペスタロッチ」（1949［昭和24］年）の冒頭部を、「平和な国スイス」という一言で開始したのではなかろうか。このさりげない一言のうちに、教育事業に挺身する後年の池田に通じるものを見出すことも、けっして不合理な解釈ではないであろう。

（2）母の感化

つづいてエッセーは、ペスタロッチの少年時代を描写する。

「二、見込みない少年

ペスタロッチは、子供の時から非常に人々と変った性格を持っていました。その顔や姿もいかにも醜く、友達からは、いろいろとからかわれたり軽蔑されていました。／それに学校の成績も大変悪く、ことに綴方や習字は、だめでした。学校の先生もあまりにも成績が悪いので『この子は到底見込みがない』と、口ぐせの様にいっていました。／この様に、友達からは馬鹿にされ、世間の人々からは奇人扱いにされ学校の先生からは、見はなされてしまったペスタロッチ……／皆さん、もし皆さんがこの様な境遇にあったらどんなに悲しく淋しいことでしょう。又その人の心も自然にひねくれるのが当然です。けれどペスタロッチはそんなことにかかわりなく、すくすくと素直に育ってゆきました。それは全く情愛の厚い母と、温情に富んだ老婢バビリーのお陰でありました。／ペスタロッチは六歳の時に父を亡くしましたが、もしも母が良くない人であったならペスタロッチはどうなっていたことでしょう。ここに母の感化の偉大さをしみじみと悟ります」(12)

少年ペスタロッチは、けっして優等生でも人気者でもなかった。友だちにからかわれ、教師から見放されつつも、彼がひねくれることなく、すくすくと成長できたのはなぜか。――その理由を池田は、「情愛の厚い母と、温情に富んだ老婢バビリー」の存在に求め、教育における女性の役割の大きさ、なかんずく「母の感化の偉大さ」に着目している。

以下本稿では、「大教育家　ペスタロッチ」の記述を、当時（1949［昭和24］年秋）書店に出て

界、人類の運命、文明の未来は、まさしく青年の教育にかかっている、と私は叫びたい」（『創立者とともに』創価学園、1982年、4ページ）。

(10) 池田大作『若き日の読書』第三文明社、1978年、115ページ。

(11) 同『私の履歴書』日本経済新聞社、1975年、73－74ページ。

(12) 『少年日本』1949（昭和24）年10月号、85－86ページ。

いた代表的なペスタロッチ伝の記述と比較対照することによって、前者の特徴を浮かび上がらせるという作業を行いたい。上記引用文に関するかぎり、その特徴は下線部に現れている。すなわち、「母の感化の偉大さ」をつづった箇所である。

まず、エッセーの当初の執筆予定者だった池田宣政の『孤児の父　ペスタロッチ』(1947［昭和22］年、世界社）を見てみよう。同書は、彼が戦前に発刊した子ども向けの評伝『偉人　ペスタロッチ』(1941［昭和16］年、大日本雄弁会講談社）を改訂したものである。細かい改訂箇所は多数にわたるが、章立てをはじめとする基本的な構成は変わっていない。最初の章「伸び行く魂の記録」は、「慈愛の父」「忠実な下女」「健気な母」「愛の家庭」「たくましい祖父」等々の小節から成っており、このことからすでに明らかなように、池田宣政は少年ペスタロッチの精神形成に果たした《男性の感化》を、かなり重視している。たとえば、「慈愛の父」の節には、「この父の慈愛の心が、そのまま次男［＝ペスタロッチ少年］につたわって、偉大な愛の人格のもといとなったのである」[13] とあるし、「たくましい祖父」の節には、「ハリ［＝ペスタロッチ少年の愛称］の心の奥にねむっていた男らしい性質は、祖父の力でよびさまされたのであった。後にどんな貧しさの中にあっても、明朗さをうしなわず、なんど逆境に追いおとされても、失敗をくりかえしても、また起き上り、信ずるところに向かって突き進んで行ったのは、みなこの男性的な心のあらわれであった」[14] とある。もっとも、「愛の家庭」と題する節では、「愛の大教育家ペスタロッチは、この愛と真心の家庭から生まれたのであった。後に、家庭教育の大切なことと、女性の力が教育上に非常に大きいものである、という信念を持つようになったのは、この慈愛の母と、忠実なバーベリーに育てられたためである」[15] とあるので、池田宣政が《女性の感化》を軽視したというわけではない。ただし、仮に彼が当初の予告通り『少年日本』にペスタロッチ伝を寄稿していたとしても、限られた紙数のなかで、山本伸一郎（＝池田大作）ほど明確に女性の意義を強調したかどうかはおぼつかない。

＊

次に、長田新の『隠者の夕暮・シュタンツだより』巻末解説（初版は1943［昭和18］年）を参照しよう。同書は、「大教育家　ペスタロッチ」の下地になった本の１つである。

まえに本稿第２節で見たように、『隠者の夕暮』と『シュタンツだより』のなかでペスタロッチは、教育における「母親」の役割を、「父親」の役割と同等に（ときにはそれ以上に）重視している。ここで簡単におさらいしておくと、「いやしくもよい人間教育は、居間におる母の眼が毎日毎時、その子の精神状態のあらゆる変化を確実に彼の眼と口と額とに読むことを要求する。／よい人間教育は、教育者の力が、純粋でしかも家庭生活全体によって一般的に活気を与えられた父の力であることを根本的に要求する」(『シュタンツだより』) [16]。「満足している乳呑児はこの道において母が彼にとって何であるかを知る。しかも母は幼児が義務とか感謝とかいう音声も出せな

---

[13] 池田宣政『孤児の父　ペスタロッチ』世界社、1947年、５ページ。

[14] 同上、23ページ。

[15] 同上、16ページ。

[16] ペスタロッチ『隠者の夕暮・シュタンツだより』長田新訳、岩波文庫、初版1943年、54ページ。

いうちに、感謝の本質である愛を乳呑児の心に形作る。そして父親の与えるパンを食べ、父親と共に囲炉裏で身を暖める息子は、この自然の道で子供としての義務のうちに彼の生涯の浄福をみつける」（『隠者の夕暮』）[17]。――こうした文章を目にしたうえで、ペスタロッチの少年時代を描こうとすれば、《母の感化》の大きさに筆がおよぶのは、ごく自然のことであろう。その意味では、「大教育家　ペスタロッチ」の記述は、けっしてとっぴな解釈ではない。

ところが、『隠者の夕暮・シュタンツだより』の訳者・長田新の解説は、以上のことをふまえつつも、最終的に《父子の情》の意義を強調しているのである。この傾向は、話がペスタロッチの家庭教育論から政治道徳論へと発展するくだりで、とくに見受けられる。長田は述べている、

> 「ペスタロッチーの政治道徳は人間性と親心子心とそして神に対する信仰との三調音の奏でる諧調であって、その基調が親心子心であるともいうことができる。しかもその親心子心を基調とするところ、かつてのわが国の政治道徳と著しく相似たところがあった。というのはかつてのわが国においては皇室は国民の宗家であり、天皇は親心を以て国民を赤子として愛撫した。父子の情こそ天皇とわれら国民とを結ぶ紐帯であり、君主の親心臣民の子心がわが国体の本義である。[……] だからペスタロッチーの君臣関係は『情は乃ち父子』と言われるかつてのわが国の君臣関係に比することができると思う」[18]

長田の解説は、それが執筆された1943（昭和18）年という時代を反映して、「父子の情こそ天皇とわれら国民とを結ぶ紐帯であり、君主の親心臣民の子心がわが国体の本義である」というふうに、ペスタロッチの教育論＝国家論を《天皇と国民との関係》から説明している。良心的知識人の長田としては、困難な時代にあってペスタロッチの翻訳を出版するための精一杯の弁明だったのかもしれないが、これも歴史の貴重なドキュメントである。もっとも、上記引用文もよく読んでみると、「かつてのわが国の政治道徳」「かつてのわが国においては」「かつてのわが国の君臣関係」というように、“かつての”という形容詞が多用されているのが目につく。これは見方によっては、現実の政治道徳や君臣関係を暗に批判したものと解することもできよう。戦時中の文章ゆえに、独特の修辞法に注意して読む必要があると思われる。

ちなみに、1936（昭和11）年に発刊された長田新の啓蒙書『ペスタロッチー』（大教育家文庫15、岩波書店）を覗いても、第１章「ペスタロッチーの生涯」にはやはり１行も《母の感化》については触れられていない。また、終戦５年目の1950（昭和25）年に完成し、長田自身が序文に「思えば今まで私の公けにしたものは、考え方に依ってはすべて今世に出るこの『ペスタロッチー伝』の研究への準備であったともいえるだろう」とまで記した上下２巻の大著『ペスタロッチー伝』

---

[17] 同上、９ページ。なお、この文章について長尾十三二・福田弘『ペスタロッチ』は、「基本的要求の充足という、人間生活の最も原初的なできごとは、主として母親（および父親）と子供との人間関係の中で生じる。この人間関係を通して、人間とは何かという人間にとって最も必要な知識への筋道を、子供は知ることになるのである」とまとめている（長尾十三二・福田弘『ペスタロッチ』清水書院、1991年、58ページ）。

[18] 『隠者の夕暮・シュタンツだより』179－180ページ。

を閲しても、「このようにペスタロッチーは兄妹達と、彼れの心を気高くし・励まし・楽しませる環境とに朝夕取り囲まれつつ『最もよい母』の膝下で生い立った」[19] との１行が見られるのみである（ただし、女中バーベリーについては、彼女への感謝をつづったペスタロッチの回想文を載せている）。そのかわり、「ペスタロッチーに強い影響を与えたものとして祖父の感化は見逃せない」として、牧師であった祖父の影響の下、少年ペスタロッチが「大きくなったら私は皆を助けよう」という民衆奉仕の志を抱いたと指摘している[20]。日本におけるペスタロッチ研究の最高権威とされた長田の描くペスタロッチ像には、どういうわけか、母の影が薄い。長田が訳したハインリヒ・モルフの『ペスタロッチー伝』（翻訳は1939［昭和14］年刊行）には、ペスタロッチの母親に触れた箇所で、教育に果たす《女性の力》について論じてあるので[21]、母の感化に言及しないのは長田独自の判断なのかもしれない。

＊

もう一言補足しておきたい。戦争中に、ペスタロッチの人格や思想における《男性的要素》が強調された例はほかにもある。たとえば、長田新とならびペスタロッチ研究の権威とされた福島政雄の著作がそうである。福島が1920年代から書きためて1934（昭和９）年に出版した『ペスタロッチの根本思想研究』と、日中戦争開始後の1938（昭和13）年に執筆・刊行した『ペスタロッチ小伝』とを比較すると面白い。前者は、ペスタロッチの育った家庭の《女性的要素》に着目して[22]、その教育学における「母性の意義」についてそうとうな紙数を割いている[23]。これに対

---

(19) 長田新『ペスタロッチー伝　上巻』岩波書店、1950年、40ページ。

(20) 同上、48－49ページ。

(21) ハインリヒ・モルフ『ペスタロッチー伝Ｉ』長田新訳、岩波書店、1939年、82－88ページ。

(22) 福島政雄『ペスタロッチの根本思想研究』目黒書店、1934年。いくつか例をあげると、「母親スザンナは豊かなる宗教的情操の人であって、その情操的感化が氏［＝ペスタロッチ］に及んだことは疑うべからざるものがある」（同書、123ページ）。「ペスタロッチを直接に哺んだ家庭の形式は、母親と、忠実なる下婢バベリと、兄妹とのつくれる、女性的要素の多きものであったのである」（同書、131ページ）。「『隠者の夕暮』において氏が真理を母親にたとえて居ることは味わうべきことであって、それは氏が母親スザンナよりそそぎ来れる温かなる親心より感得したものであると言うことができる」（同書、138－139ページ）。

(23) 同上。「氏［＝ペスタロッチ］が宗教的自覚の初における母性観は既に前にも引用したる『隠者の夕暮』の一節にあらわれたるものであって、母性を真理にたとえて居るものである。即ち母性の本質はその子供等と生命において一味となるという点に存する。母親の喜びと知恵とはその子供等の喜びであり要求である。その母親は感じ深き善き母親である。而して此の母性は奉仕によって子供等の生命を養うのである」（同書、157ページ）。――この福島説の是非についていまは問わないことにするが、彼があまりに「母性」という語を多用することに対して、本稿筆者が違和感を覚えるということだけは述べておきたい。そもそもペスタロッチは「母」という語は使用しているが、「母性」などとはいっていない。

もっとも、ペスタロッチが用いる「母」や「父」といった比喩すらも、ジェンダー論の支持者が増えつつある今日では古めかしい印象を与えるかもしれない。この点に関しては、福田弘『人間性尊重思想の教育と実践――ペスタロッチ研究序説』（明石書店、2002年）の以下の見解に傾聴しておきたい。「家庭＝『居間』は、繊細で洞察力を備えた『母親の眼差し』という、いわば愛に満ちた、すべてを包みこむような母性的な側面を備えている。それと同時に、そうした愛にもとづく細やかな人間関係を成立させるために家庭そのものを支え、活気づけ、さらに家族関係全体のなかでしかるべき尊敬と恭順の対象

して後者は、冒頭部分からいきなり、ペスタロッチ思想の本質は《男性的要素》に求めるべきであり、その内実は熱烈たる《祖国愛》にほかならないと力説するのである[24]。こうした違いの背景には、著者の研究の深化という主観的条件のみならず、十五年戦争の拡大という客観的条件があることはまちがいない。いずれのペスタロッチ解釈も、つまるところは、解釈する人間の属する時代と社会の“函数”にすぎないのである（もちろん、そうであるからといって、原典を歪曲するような恣意的な解釈は断じて許されてはならないが）。このことは、さきに見た池田宣政や長田新のペスタロッチ解釈についてもいえることである。

こうしてみると、『少年日本』掲載の「大教育家　ペスタロッチ」が《母の感化》を重視したということは、歴史のドキュメントとしても少なからぬ意義をもつことがわかる。この意義は、もちろん『隠者の夕暮・シュタンツだより』の“素直な読解”の賜物であろうが、それ以上に、戦争を否定し平和を希求する“若き魂”のいさおしと見るべきであろう。

（3）人間教育

さて、今度はペスタロッチの青年時代に筆が向けられる。

「三、失敗また失敗

ペスタロッチは、小学校も成績が悪かったのですが、中学校も大学校も同様に余り良い成績ではありませんでした。大学を卒業したペスタロッチは、最初はなにになろうと思っていた事でしょう。それは少年の時、祖父の所に遊びに行っていた時、牧師である祖父の信義の立派なことに感心し、牧師になることを決心していました。けれどもはじめの説教に失敗してしまって、これでは到底見込みないとあきらめてしまいました。／牧師をあきらめたペスタロッチは今度は、法律家になろうと心にきめました。がこれも試験の際、遂に失敗に帰してしまいました。／とうとうみんなあきらめて『自分は、とても学問で身を立てる事はだめだ、そうだ百姓になろう』といって、ニューホーフという所で農業をやること

となっているような、そんな権威をもつ『父親の力』という、いわば父性的な側面とをもっているはずである。[……] むろん、ペスタロッチは、母親は母性のみをもち、父親は父性のみをもつ、と言うのではない。母性的側面、父性的側面の両者が、家庭教育には重要であることを象徴的に言っているのである」（同書、180ページ）。

[24] 福島政雄『ペスタロッチ小伝』福村書店、1938年。「ペスタロッチの本来の面目はその生命の原始のすがたに存する。教育の上における生命の力如何は、その原始の相における溌剌性の如何に依繋する」（同書、3ページ）。「ペスタロッチの伝記者の多くは、ペスタロッチが女手に育ったということを力説し、ペスタロッチ自身の著作よりの引用によってペスタロッチに男性的要素の欠けたることを証明しようとして居る。[……] 併しこれを以てペスタロッチに男性的要素が欠けて居ることを物語るものと考えることは出来ない。男性的要素を以て果敢の気象とするならば、ペスタロッチにはむしろ大にそれがあったのである」（同書、4－5ページ）。「『[……] 私は祖国の為には我が生命を忘れ、妻の涙を忘れ、我が子のことをも忘れるであろう。』／これこそペスタロッチの真面目である。アンナとの結婚のために突進するペスタロッチの生命の原始の相は、やがて祖国のことに妻を忘れ、子を忘るる原始の相である。此の原始の相そのままのペスタロッチは未だ教育者ペスタロッチではないであろうが、併し此の相をあくまでも素材として進むペスタロッチの上に教育者としての生命は開ける」（同書、11ページ）。

にきめました。この時はペスタロッチが二十三歳の時でした。しかしずいぶんお金をかけ骨を折ったがやはりこれも思う様にゆかず、収入は全くたえてしまいました」[25]

祖父の姿を見て「牧師」になることを志すも、説教に失敗する。今度は「法律家」になろうとするが、試験で落第する。最後に「農業」をやろうとするが、経営に行きづまる。小見出しにある通り、「失敗また失敗」の連続である。

青年ペスタロッチの人生もまた多難であったことは、多くの伝記に書かれている。ただし、上の文章ほどに「失敗」を強調するものは少数派のようである。例によって、池田宣政の『孤児の父　ペスタロッチ』を見てみると、ペスタロッチが牧師志望をやめて法律家を目ざしたのは“経世済民”の念からであったとしているし[26]、農業を始めたのは親友ブルンチェリーの遺志を実現するためであったと述べている[27]。また、長田新の『ペスタロッチー』は、ペスタロッチがルソーの影響で神学をすてて法学に移ったとし、「国民の経済と教育との振興に道を拓こう」として農業に手をそめたと書いている[28]。彼が戦後に書いた『ペスタロッチー伝』はもう少し詳しい記述をしており、ペスタロッチが法学を選んだ背景には、説教の失敗以外に、「全スイスの公けの事件に力強く関係しようというこの頃益々強くなって来た衝動」と、「親友ブルンチェリーが主張したような、宗教的な事柄に対する極めて自由な傾向」があったと説く[29]。福島政雄『ペスタロッチ小伝』は、職業選択の理由についてはとくに触れていないが、青年ペスタロッチの生き方を総括して「様々の宗教改革運動中においても最も熾烈なる趣を有するツヴィングリの宗教改革の如きは、恐らく最も強くペスタロッチの生命の内奥に響いたものである。此の熾烈なる生命を以て向かうところ、青年ペスタロッチの前にはすべての物が炎々として燃えたのである」[30]とつづっている。――以上の文献のいずれも、“落ちこぼれペスタロッチ”ではなく、“選良（エリート）ペスタロッチ”を描いている感がある。

これらと比較すると、エッセー「大教育者　ペスタロッチ」は、むしろ青年ペスタロッチの挫折や苦闘に光を当てている点で興味深い。なお、彼が農業経営に失敗したことについて、「この時はペスタロッチが二十三歳の時でした」とあるが、『少年日本』10月号の発刊時、エッセーの著者・山本伸一郎（＝池田大作）は21歳であった。「二十三歳」という年齢に言及しているところが、ペスタロッチに対する著者の親近感をうかがわせる。

＊

---

(25) 『少年日本』1949（昭和24）年10月号、86ページ。

(26) 前掲『孤児の父　ペスタロッチ』、34ページ。「[ペスタロッチは] はじめ祖父にならって牧師になろうと考えたが、老先生［＝専門学校教師ボードマー］の感化をうけ、政治家となって世の中を改善し、貧民、農民をすくうために一身をささげる決心をかため、病気にかかったのを機会に大学の神学科に入学することをやめて、独力で法律の研究をはじめたのである」。

(27) 同上、34－39ページ。

(28) 長田新『ペスタロッチー』（大教育家文庫15）岩波書店、1936年、４ページ。

(29) 前掲『ペスタロッチー伝　上巻』、49ページ。

(30) 前掲『ペスタロッチ小伝』、９ページ。

このあとエッセーは、いよいよ教師ペスタロッチの誕生を描き、彼が子どもたちの教育にいそしむ姿を活写していく。

「四、ここに天職あり

ペスタロッチは大変に子供が好きでした。思う様にゆかぬ百姓のかたわら、子供を集めて一緒に遊ぶ事がなによりの楽しみでした。／その時ペスタロッチは気がついたのであります。『そうだこんなにも貧乏で学校に行かれない子供がいるのだ、この子供達のために教育をしてやろう』。それで二十人ばかりの子供を集め、自分の費用で教育をはじめました。／これがペスタロッチの大教育家になった第一歩であります。なんと単純でありながら崇高な歩み方でありましょう。／栄養不良と虱ばかりの乞食の様な子供の中で、ペスタロッチの教育は始まりました。そして自分が行う所を子供達に見習わせ、子供と共に畑に出てはこれを耕し、雨の日は家の中で綿を紡がせ昼夜真剣に、みんなを人間にするために力を注ぎました。身体の弱いものは強くする様に、無作法な子には行儀をなおし、心の僻んだものには、心をなおしてやる様に尽しました。そして心を浄く正しく持たすために聖書を暗誦させました。／苦しい生活のうちにも子供達には良い物を食べさせ、自分はいつも悪い所を食べました。ですから子供達は、日ましに健康になり血色が漲りぐんぐん成長してゆきました」[31]

とくに下線部を、本稿第２節で見た『隠者の夕暮・シュタンツだより』の内容と重ねあわせながら読んでみよう。「自分が行う所を子供達に見習わせ、子供と共に畑に出てはこれを耕し」――これは、生活そのものの必要ないし要求に基づいて「事物の最も本質的な関係を人間に直観させる」（『シュタンツだより』）[32] という《直観教授》の原形である。これによって子どもは、「自己の認識を純にまた素直に応用し、かつ静かな勤勉によって自己のあらゆる力と素質とを練習したり使用したりすることによって、その本性からして真実の人間の智慧に達することができるように陶冶される」（『隠者の夕暮』）[33]。ペスタロッチはこのようにして、「みんなを人間にするために力を注」いだ――すなわち《人間教育》を行ったのである。

以上のくだりを、例によって、当時（1949［昭和24］年）出ていた他のペスタロッチ伝と比較してみよう。池田宣政の『孤児の父　ペスタロッチ』は、貧しい子どもたちの教育に没頭するペスタロッチの姿を小説風に描いたあとに、後年のペスタロッチの「私は、数年間、乞食子供とともに生活し、とぼしい食物をわけあって食べながら、せめて彼等に人間らしい教育をほどこしてやりたいと思い、私みずからは乞食のような生活をした」という回想を紹介している[34]。ところが、この本の全体を見わたしてみると、「人間」という言葉が登場するのはいま述べた箇所くらいで、あとはむしろ「国民」という言葉が圧倒的に多く使われているのである。たとえば同書の序文には次のようにある。

---

(31) 『少年日本』1949（昭和24）年10月号、86－87ページ。

(32) 前掲『隠者の夕暮・シュタンツだより』、51ページ。

(33) 同上、16ページ。

(34) 前掲『孤児の父　ペスタロッチ』、87－91ページ。

「わが日本は一部まちがった考えの人々のためにあやまられ、不正な戦争を起こした当然のむくいをうけました。われわれは過去のあやまちをふたたびしてはなりません。／そのためにもっとも大切なことは、国民教育をあくまで、充実させて正しい心の国民をつくりあげることであります。これからの日本の力となるべき少国民に、ほんとうの教育をさづけてやることであります。／私がこの『ペスタロッチ伝』を書きましたのも、ペスタロッチが、そのころのスイスにはびこっていた貴族と一部の特権階級のために一般農民が苦しめられているのを救い、正しい平和国家を建設するためには、国民教育をさかんにしなければならないことに気づき努力したからであります」[35]

じつに高邁な理想が縷々つづられているが、ここで池田宣政が用いている「国民」という言葉の意味を正しくつかむには、同書の初版である『偉人　ペスタロッチ』(1941［昭和16］年）の序文にも目を通しておく必要がある。こちらは太平洋戦争勃発直前の1941年11月３日の執筆である。下線部に注意しつつ、読者めいめい、２つの序文を対照してほしい。

「いま、わが大日本帝国は空前の大非常時にぶつかっています。いまこそ国運隆々たるわが国が、すばらしい飛躍をなし、全世界の上に皇威をいやが上にもかがやかすために、日本民族の実力を真剣に発揮すべき絶好の機会なのであります。／この非常時にあたって、もっとも大切なことは、国民教育をあくまで、充実させるとともに全国民が、一億一心たがいに献身しあい、たすけあい、かたくむすびあった総力で、滅私奉公のまことをつくすことであります。／私がこの『ペスタロッチ伝』を書きましたのも、ペスタロッチの教育法が、わが国の国民教育上に大なる影響をあたえたこと、その一生が自分を忘れて教育にささげた一生であり、その心がまえがとうといこと、またペスタロッチのさいごの失敗が全く部下の間の不和のためで、一致協力がいかに大切なものであるかを教えていることなどを考えたからであります」[36]

いかがであろうか。およそ文章というものは、それが書かれた時代の社会状況をどこかに反映しているものだが、上の２つの序文ほどこの真理をわかりやすく教えてくれる例は、めったにないと思われる。煩瑣になることを恐れず、あえて長文を引用した次第である。

“人間を育てる”ことと、“国民を育てる”こと――。ペスタロッチ教育学の本来の理念においては、あくまで、前者あっての後者である。本稿第２節で『隠者の夕暮・シュタンツだより』の内容を確認済みのわれわれには、このことはすでに明瞭になっているが、近代日本の教育界においては、つねに後者が前者に優先されたのだった。しかし、上の序文を見るかぎり、この違いを池田宣政がどの程度意識できていたかは、はなはだ怪しいといわざるをえない。戦後のほうの序文を見ても、「正しい心の国民をつくりあげる」「これからの日本の力となるべき少国民に、ほんとうの教育をさづけてやる」という記述には、やはりそうした疑念がつきまとう（そもそも「少

---

[35] 同上、２－３ページ。

[36] 池田宣政『偉人　ペスタロッチ』大日本雄弁会講談社、1941年、２－３ページ。

国民」という言葉自体、1941［昭和16］年３月公布の国民学校令に基づいている。同令によって小学校は「国民学校」と改称され、児童は「少国民」と呼ばれるようになった。少国民はヒトラーユーゲントの年少男子部門Jungvolkの訳語である)。さきに本稿筆者が“仮に池田宣政が『少年日本』にペスタロッチ伝を執筆していたならば、山本伸一郎（＝池田大作）筆のものとはずいぶん異なる内容になっていただろう”と述べたのは、以上を念頭に置いてのことである。

＊

もう一つ、長田新の『隠者の夕暮・シュタンツだより』解説も参照しておきたい。さすがにペスタロッチ研究の最高権威だけあって、長田は、ペスタロッチ教育学の主眼が「人間を人間にする」[37] ことにあるとして、次のように述べている。「貧民の救済も社会の改革も結局人間そのものの内界の純化と確立とを基礎とするから、神の賜える人間性の覚醒と陶冶とを目的とするいわゆる『人間学校』の建設こそ急務であるとペスタロッチーは考えた。かくて彼の教育学はまた『人間性の教育学』でもある。［……］その『人間学校』建設の企図は、彼によればまずその礎石を幼きものの魂の純化と確立とに置く基礎教育でなくてはならない」[38]。――以上の文章は、おそらく、「大教育家　ペスタロッチ」にある「みんなを人間にするために力を注ぎました」という叙述の典拠となったものであろう。

ところが、この解説が出た翌年に刊行された長田の『国家教育学』(1944［昭和19］年）をひもとくと、当の長田がペスタロッチの《人間教育》の思想を論難している箇所があり、上記解説文を知っているわれわれとしては、なんともいぶかしく思わざるをえない。いま本稿は、菊版で270ページもあるこの大著について論陣を張るだけの余裕をもたないが、本稿主題に関する範囲で最小限の言及を行っておく。同書第４章「民族と教育」で、長田は次のように述べている。

「ルソーは善良の人間を作ると言い、ペスタロッチーは人間を人間にすると言い、フレーベルは神性を顕現すると言い、ヘルバルトは品性を陶冶すると言い、ナトルプは自然を理性化すると言っている。併しそれでは余りに抽象的であり一般的であって、教育学は単に理念の学として倫理学その他の価値学と少しも選ぶところがなく、従って人間の形成を固有の課題とする形成作用の学としての性格が見られない。恐らく形成作用の学たるところに固有の性格がなくてはならない教育学は一層具体的な客観的な立場に立たなくてはならないだろう。［……］吾々は進んでその自己活動に具体的の内容を与える客観的基礎を明らかにしなくてはならない。そこに社会的な歴史的な民族的なまた国家的な文化の立場が考えられる。斯くて吾々は純粋人間・内的人間乃至人間性の教育学、品性陶冶の教育学、自然の理性化の教育学、児童中心の教育学等所謂主観的な形式主義の教育学に対して、客観的な実質的価値教育学を考えなくてはならない。斯かる主張は前にも挙げたディルタイを先駆として最近漸くクリーク、ロホナー、シュトゥルゥム、シュプランガー等に依って発展されつつあるが、この機運は国家教育学の素地を深く蔵

---

[37] 前掲『隠者の夕暮・シュタンツだより』、167ページ。

[38] 同上、141ページ。

するヘーゲル哲学の復興に依って愈々促進されつつある」[39]

本稿主題に引きつけて要約すると、ペスタロッチの《人間教育》思想は、いまだ抽象的・主観的・形式的であって、具体性・客観性・実質性を欠いている。そこで「社会的な歴史的な民族的なまた国家的な」教育学が求められるのであり、いまドイツではその新たな潮流が世を席巻しつつある――そう長田は説述する。このように『国家教育学』は、ペスタロッチの《人間教育》思想が戦時中に国家主義陣営から攻撃されていたという重大事実を教えてくれる。時代の険しさを深く刻印した書物であるといえよう。さて、長田の著作のなかでふたたび《人間教育》思想が称揚されるのは、1950（昭和25）年９月発刊の『ペスタロッチー伝』においてである。その序文で長田は、フィヒテがペスタロッチに依拠してドイツの教育を復興させたように、日本人も「人間そのものを作ろうとするペスタロッチーの教育法」のうちに祖国の急を救う秘術を学ぶべきである、と述べている[40]。『少年日本』に「大教育家　ペスタロッチ」が掲載されて、ちょうど１年後のことであった。

このように、池田宣政や長田新のペスタロッチ論まで視野に入れてみると、エッセー「大教育家　ペスタロッチ」において《人間教育》思想がさりげなく言及されていることにも、歴史的に重要な意味があることが見えてくる。「みんなを人間にするために力を注ぎました」――このペスタロッチの思いは、そのまま、『少年日本』の若き編集長・池田大作の思いでもあったにちがいない。10月号の編集後記（池田大作執筆）が、エッセーの内容と見事に呼応しているのはそのゆえであろう。「編集局としましては、明るく正しく少年を導く様に誠心を打込んで編集に従事して居ります。／雑誌の進み方も、面白くて勉強の材料になり、又内容もこれから新しい世界を築き上げる少年に、力強く豊かな気持を抱かせる様、希望して居ります」[41]。16年後、池田は『人間革命』第１巻（1965［昭和40］年）のなかでいう――「教育の目的は、機械をつくることではなく、人間をつくるにあるといった、思想家がいた」[42]、「よき種は、よき苗となり、よき花が咲こう、よき少年は、よき青年となる。よき青年は、よき社会の指導者と育とう」[43]。いうところの思想家とは、もちろん、ペスタロッチを指している。《人間の育成》と《国民の育成》との順番を混同しないことの大切さを、池田はペスタロッチから学んでいた。（創価大学創立時［1964〔昭和39〕年に設立構想発表、1971〔昭和46〕年に開学］に池田が語った「人間教育」という言葉を理解する上でも、この点に留意しておく必要があるだろう。）

（４）人類の進歩のために

こうして、約30年の苦闘を経て、ついにペスタロッチの努力が結実するときが訪れる。

---

(39) 長田新『国家教育学』岩波書店、1944年、81－82ページ。
(40) 前掲『ペスタロッチー伝　上巻』、８ページ。
(41) 『少年日本』1949（昭和24）年10月号、130ページ。
(42) 池田大作『人間革命』第１巻、聖教新聞社、1965年、24ページ。
(43) 同上、27ページ。

「五、五十三歳で認められる

ペスタロッチの生活は一日一日苦しくなり遂に全く乞食同様になってしまいました。／すると世間の人々もペスタロッチから遠ざかってゆきました。が、そんな事には気にかけず、ますます教育の尊さ重要さを考えて子供の為に尽しました。／いつの世でもこの様な心構えこそ偉人を作り上げる基いです。のちにペスタロッチは、無一物になってしまったので色々職場を探しましたが、元来無器用な彼れには、適当な所がありませんでした。／それで、その貧乏の中で雑誌社に売る原稿を書く事にきめました。ですが書く紙もなかったのです。それで道端に捨てられた紙ぎれを拾って書いたりしました。これが有名な『リーエンハドとゲルトルード』という物語りであったのです。／やっとの事でこの原稿を売り生活も楽になって来たのです。この費用をつかって更に教育に身を捧げ五十三歳の時、遂に社会的にも認められ、教育界からも重んぜられる様になりました。これより全ヨーロッパの人々も彼の教育を見習う様になり世界の歴史の上に大教育家としての頭を擡げたわけであります。／人類の進歩には最も教育が大切であります。／立派な教育がなくして何の人類の発展がありえましょうか」[44]

教育事業に打ちこめば打ちこむほど、ペスタロッチは経済的に貧しくなった。貧しくなるにつれて世間の人々もペスタロッチから遠ざかっていった――このエピソードをつづりながら、池田は、出版事業の赤字に苦闘する師・戸田城聖に思いをはせていたのではなかろうか。そして、50代で「社会的にも認められ、教育界からも重んぜられる」という勝利の劇を、戸田が演じるであろうことを確信し、その実現のためにもいま自分は編集業に取り組んでいるのだと、ひそかにわが身を鼓舞したのではなかろうか。「五十三歳で認められる」という小見出しには、そのように想像させるものがある。いうまでもなく「五十三歳」とは、ペスタロッチが戦争の傷跡も生々しいシュタンツに赴き、大教育者として第一歩を踏み出した年齢にほかならない。ちなみに、「大教育家　ペスタロッチ」が書かれた1949（昭和24）年秋に、戸田は49歳であった。

さきに本稿筆者は、池田がペスタロッチの「二十三歳」の苦闘に自分を重ね合わせていたのではないか、との見解を述べた。これらの推測がもし正しいとするならば、このエッセーの行間には、戸田との師弟関係が太い糸で織りこまれているといえるだろう。このことは、池田が後年に述べた、「生涯、苦難のなかを、誰よりも青年を愛し、人間教育の得がたい財宝を残してくださった戸田先生のなかに、ペスタロッチのイメージがつねにダブって私の脳裏に泛ぶのである」（『若き日の読書』）[45] という言葉によっても、裏づけられるように思う。

＊

さて、「大教育家　ペスタロッチ」の最終節にあたる上の文章を、当時の他のペスタロッチ伝と比較したときに、このエッセーの特徴をなすと思われるのは、最後の「人類の進歩には最も教育が大切であります。／立派な教育がなくして何の人類の発展がありえましょうか」という一文である。これは、『隠者の夕暮』から19歳の池田が「読書ノート」に書き取った一文――「人類の純

---

[44]『少年日本』1949（昭和24）年10月号、87ページ。

[45] 池田大作『若き日の読書』第三文明社、1978年、122ページ。

粋な浄福の力はすべて技巧や偶然の賜物ではない。それらは、すべての人間の本性の奥底にその根本的の素質と共に横たはっている。それらの浄福の力を完成することは人類の普遍的の要求である」[46] ――を典拠にしていると見てよい。また、同じく『隠者の夕暮』にある、「三　人間の本質をなすもの、彼が必要とするもの、彼を向上させるもの、そして彼を卑しくするもの、彼を強くしたり弱くしたりするもの、それこそ国民の牧者にも必要なものであり、最も賤しい小屋に住む人間にも必要なものだ。／四　至るところで人類はこの必要を感じている。至るところで彼らは困苦と労作と熱望とをもって向上しようと力めている。それにもかかわらず人類の幾世代は満足せずに凋落してしまうので、その臨終の床でおお声で叫ぶ」[47] 等の文章群も、典拠に数えてよいだろう。

これらの文章に通底するキーワードは「人類」である。“人類の向上”のために真実の教育法が探求されねばならないとペスタロッチは述べ、それを池田が「人類の進歩には最も教育が大切であります。／立派な教育がなくして何の人類の発展がありえましょうか」という結語にまとめている。ところが、当時の他のペスタロッチ伝を閲すると、「人類」よりも、「祖国（日本）」という言葉が基調をなしているのである。このことは、それらのペスタロッチ伝のなかで「人間」よりも「国民」という語が多用される構造と、パラレルな関係になっている。

まず、池田宣政『孤児の父　ペスタロッチ』であるが、「人類の教師」という章のタイトルを除くと、「人類」の語が登場するのは次の１箇所のみである。「ペスタロッチは、何故に偉大であったか。[……] 一身一家をかえりみず、貧民救済のため、祖国興隆のために、国民教育を徹底させようとして、新教育法を実行し、すすんでは教育によって、全人類の幸福につくそうと、献身敢闘したところに、偉大さがある」[48]。これ以外のところでは、たとえば、「私［＝池田宣政］は諸君がペスタロッチの事業の表面だけを見ず、その根底となっている心がまえと、真剣なすがたをよくよく吟味して、そこに学び、自己をたかめ、祖国日本に役立つ国民になっていただきたいと思う」[49] とあり、あくまで「祖国日本に役立つ」ことが教育の主眼とされている。また、長田新は、戦後に出した『ペスタロッチー伝』の序文で「ペスタロッチーを今日吾が国に招来しようとする吾々の意図には、右に述べたような吾が国の教育学の発展に寄与することを希願するという謂わば一般的の意味だけではなくて、太平洋戦争に一敗地に塗れて、今や内に外に様々な危機に直面する祖国の急を救う一つの秘術を学び取ろうという意味もある」[50] と述べている。もちろんペスタロッチは、若き日にルソーの影響を深く受けてスイスの民主革命に参画したほどの愛国者でもあったのだから、これらの伝記が“祖国復興”の指標を彼に仰ぐのも、敗戦という未曾有の社会状況からいってごく自然な動きではあったろう。

もう一つ、別の事例を見ておきたい。福島政雄は、1929（昭和４）年に行った長大な講演に手

---

(46) 前掲『隠者の夕暮・シュタンツだより』、15ページ。
(47) 同上、８ページ。
(48) 前掲『孤児の父　ペスタロッチ』、282ページ。
(49) 同上、283ページ。
(50) 前掲『ペスタロッチー伝　上巻』、８ページ。

を加え、戦後に『ペスタロッチ　隠者の夕暮』(1954［昭和29］年）として世に出している。同書で彼は、池田宣政や長田新とは異なる仕方でペスタロッチを日本に結びつける。すなわち、ペスタロッチが18世紀ヨーロッパの圧制暴虐を激しく弾劾し、「君主の親心、民の子心」が正しい国家社会を実現させると考えたことについて、福島はこう評するのである。

「ペスタロッチは日本に生れて来れば多少よかったかと思う。ドイツ人はペスタロッチが同じドイツの文明を持ち、ドイツ哲学者の代表カントの哲学思想と符節を合するものがあるのでペスタロッチをドイツ本国へ引込もうとして居るのでありますが、私は別にペスタロッチを日本へ引込もうとは致しませんが、生れ場所が違って居った様な気がする。若し日本に生れて居ったらペスタロッチの言うことは一方に於ては激しても他の一面に於ては柔らいで感謝と云うことをしみじみ感じたことでありましょう、その感謝と云うことも直接にこの国家社会に対して極く自然に味わうことが出来たであろうと思うと実に惜しいことであると云うことを思わないでもありません」[51]

福島はその後、1969（昭和44）年にも同様の見解を披瀝している。「ペスタロッチが考えておるような理想の国家の姿は、東洋の日本においてはじめて発見できるのである」[52]、「ペスタロッチが日本の国に生れたならば、ああこの国こそは自分の理想とする国家の、ある大事な点を備えておる国家である。この国家においては、自分は日の御民として、その明るい方に明るく尽すことができるのであるという自覚を起こしたに違いない」（『ペスタロッチ読本』）[53]。福島はかなりの期間にわたって国粋主義に深く参入した人だったが[54]、戦前に関するかぎり、彼の立場が突出したものであったとは必ずしもいえない。長田新の『隠者の夕暮・シュタンツだより』解説にも次のようにあったことを想起しよう。「父子の情こそ天皇とわれら国民とを結ぶ紐帯であり、君主の親心臣民の子心がわが国体の本義である。［……］だからペスタロッチーの君臣関係は『情は乃ち父子』と言われるかつてのわが国の君臣関係に比することができると思う」[55]。

*

おそらく、池田宣政や長田新、福島政雄といった人々にとっては、「人類」という言葉はあまりに抽象的・主観的・形式的に過ぎ、「祖国」や「国家」といった言葉にこそ具体性・客観性・実質性が感じられたのであろう。そして、彼らのそうした感覚に一定の妥当性があることも否定はできない。しかし、「祖国」という言葉も、一つの観念である。観念が独り歩きをし、富国強兵政策のスローガン的な役割を担うならば、非常時には人々の頭上に猛威をふるうことになる。その最大の被害者こそ戦時下の子どもたちであった。太平洋戦争勃発の２ヵ月後に発行された『初等修

---

(51) 福島政雄『ペスタロッチ　隠者の夕暮』1954年、福村出版、122ページ。

(52) 福島政雄『ペスタロッチ読本』（ペスタロッチ『隠者の夕暮』福島政雄訳、角川書店、1969年所収）、129ページ。

(53) 同上、130ページ。

(54) 同上、154－156ページ。

(55) 前掲『隠者の夕暮・シュタンツだより』、179－180ページ。

身科　二』(1942［昭和17］年２月）の一節を見よう。

「靖国神社には、君のため国のためにつくしてなくなった、たくさんの忠義な人々が、おまつりしてあります。[……]／君のため国のためにつくしてなくなった人々が、こうして神社にまつられ、そのおまつりがおこなわれるのは、天皇陛下のおぼしめしによるものであります。／私たちの郷土にも、護国神社があった、戦死した人々がまつられています。／私たちは、天皇陛下の御恵みのほどをありがたく思ふとともに、ここにまつられている人々の忠義にならって、君のため国のためにつくさなければなりません」(56)

ここでは、「国」は単なる“ふるさと”ではなく、子どもたち一人ひとりに絶対的な忠誠と死とを要求する“神”の位置に祭り上げられている。軍国主義に苦しめられた世代のなかに、国という観念への不信感を抱く者がいたとしても不思議なことではない。「大教育家　ペスタロッチ」の著者は、まさにその戦中派世代――より厳密には“サクラ読本世代”――に属している（池田大作は1928［昭和３］年生れ)。池田宣政や長田新のペスタロッチ伝を参照しつつも、彼らとは異なる表現を選んでいるのは、確たる理由があってのことである。それに、なんといっても、「大教育家　ペスタロッチ」の読み手は、軍国主義の痛苦を嘗めさせられた子どもたちである。国という観念に青春を奪われた人間が、同じ被害をこうむった後輩の世代に向けて、その観念の使用を控えるのはきわめて当然の処置といえよう。

エッセー「大教育家　ペスタロッチ」が「人類の進歩」「人類の発展」という言葉を用いてペスタロッチ教育学の意義を捉えていることの意味が、いまや多少なりとも浮かび上がってきたのではなかろうか。もう一度『少年日本』10月号の編集後記を引用して、この項の締めくくりにしたい。「雑誌の進み方も、面白くて勉強の材料になり、又内容もこれから新しい世界を築き上げる少年に、力強く豊かな気持を抱かせる様、希望して居ります」(57)。――ここでいわれる「新しい世界」とは、当然ながら、日本という特定の場所を意味しているのではない。国家主義という名のムラ意識から脱却し、全人類の進歩と発展を願う――そうした人間のまえに広々と開けている空間のことをいうのである。このエッセーの語りかけに応えて学ぼうとする、一人ひとりの少年少女が住むところ、すべての土地が“新しい世界”にほかならない。雑誌のタイトルである『少年日本』という言葉も、本当は、そうした“若き世界市民”の別号と解すべきである(58)。(ちなみ

---

(56)『初等修身科　二』文部省、1942年、７－９ページ。

(57)『少年日本』1949（昭和24）年10月号、130ページ。

(58) 当初「日本少年」という誌名が予定されつつ（『冒険少年』８月号、49、57、72ページの編集部記事を参照)、最終的に『少年日本』となった理由も、このことと関係しているのではなかろうか。「日本少年」という名前では、どうしても“日本の少年”くらいの意味しか想像させることができない。これに対し、『少年日本』という名前は、“日本という名の少年”を意味し、そのぶんスケールが大きく感じられるのである（つまり、戦後の“新生日本”を象徴する名前ということである)。いいかえれば、「日本少年」(＝日本の少年）の活動範囲があくまで日本に限られるのに対し、「少年日本」（日本という名の少年）のそれは全世界に開かれているのである。――もっとも、以上はあくまで本稿筆者の仮説であり、本格的な

に、「揺籃を動かすものは世界を動かす」というペスタロッチの広く知られた格言がある。いま言及した「新しい世界を築き上げる」という言葉のなかに、池田が創価大学創立時に掲げた「新しき大文化建設の揺籃たれ」という基本理念の原型を見ることも可能であろう。）

むすびに

以上、山本伸一郎（＝池田大作）筆のエッセー「大教育家　ペスタロッチ」について、執筆の背景、成立の過程、内容の意義を探索してみた。前編・後編あわせて（注を含め）原稿用紙200枚分におよぶ冗長かつ煩瑣な叙述となったが、このエッセーに込められたメッセージを可能なかぎり精確に把握して、21世紀という時代を生きるうえでの糧とするためには、最小限、これだけの手続きをふむほかなかった。本当は、これでもまだ足りないのだが。

ともあれ、19歳から21歳にかけての若き日々に、池田大作がいかなる思いでペスタロッチを読み、そこから何を得ていたかということは、本稿作業を通して少しは明らかになったように思われる。平和への切なる思い、女性のもつ可能性への期待、苦闘する若者への共感、人間教育への情熱、虚飾や保身への怒り、人類への貢献の決意、等々――これらさまざまな要素を包蔵したエッセー「大教育家　ペスタロッチ」は、池田のその後の著述活動を予感させるに十分な発動力と方向性とを有している。そして、創価大学をはじめ幾多の教育機関を設立する実践の原点が何であったかをも教えてくれる[59]。このエッセーほど池田の《処女作》と呼ぶにふさわしい文章はない――いま本稿筆者は、世の研究者に向かってそう断言したい思いである。

まことに、青年時代の読書ほど、人間の精神形成にあずかって力あるものはない。しかも池田の場合は、終戦からまもない大動乱期にあって、新生日本の未来を思索しつつ、おのれの使命を模索しながらの読書であった。実りが少ないはずがない。「読書ノート」に抜き書きされた５つの文章がいずれもペスタロッチ教育学の重要テーゼであること、そして「大教育家　ペスタロッチ」の描く人物像が数々の点で時代の真実の要求に適っていること――この２つの事実は、池田の読書がいかに真剣で真面目なものであったかを物語って余りある。真の読書とは、まさしくこのような行為をいうのである。

考察は今後の課題としたい。

[59]「大教育家　ペスタロッチ」を書いた翌年（1950［昭和25］年）の11月16日、池田は日記にこう記している。「昼、戸田先生と、日大の食堂にゆく。／民族論、学会の招来、経済界の動向、大学設立のこと等の、指導を戴く」（池田大作『若き日の日記　上』［『池田大作全集第36巻』所収］聖教新聞社、1990年、155ページ）。また、この約６週間後の12月28日の日記にはこうある。「ナポレオンは、戦勝した。次に、大敗、又戦勝。最後は、敗戦の英雄であった。／ペスタロッチは、五十年の人生の戦いは、完敗の如くであった。而し、最後は、遂に勝利の大教育者として飾った。／今、自分は、どのように戦い、どのように終幕を飾るかが重大問題だ」（同、174－175ページ）。――師・戸田城聖との語らいのなかで、若き池田の胸中に大学設立の構想が芽生え始めたころ、ペスタロッチは池田の魂を鼓舞する偉人の一人であった。